婦雲

荻原井泉水主宰

春季號

第三十四卷

第六・七號

昭和二十二年三月一日（毎月一日發行）

昭和二十二年二月十五日印刷納本

荻原井泉水著（隨筆集）

京洛春秋　價十五圓　送料一圓

荻原井泉水筆

自筆句帖　四二〇圓

一、鴨川帖（祇園の夜をうたふ）

二、月光帖（月の句とりぐ十三）

三、淺香帖（伊豆の湯にての作）

これは印刷の複製でなく墨の香も新しい肉筆の畫帖風。和紙和綴の美本、桐箱入（箱書付）

吉井勇筆

自筆歌集　各二二〇圓

一、祇園抄（祇園なつかしき秀歌）

二、清閑抄（清貧に閑居する最近の作）

三、旅情抄（旅に關する歌をつづる）

いづれも自筆桐箱入、一葉々々鑑賞にたへる秀れた美術品

分賣自由・御送金次第書留にて送ります。

京都市京大北門前

日井書房

振替京都九二二

層雲

第三十四卷　第六・七號　通卷…第四〇二・三號

無畏

日本の新憲法が成立した。近く發布される。此の憲法には、日本は戰爭をしないといふことが明記してある。戰爭をほうきしたのだから、軍備といふものも一切作らないのだ。そこで、若し他國から侵略された時はどうなるのか、はなはだ不安な、畏るべきことではないか、といふ考も多くの國民はもつてゐるやうである。

だが、私はそれと反對に考へる。大戰爭以前、アメリカは？、ソヴイエトは？と疑心暗鬼のきもちで、軍艦や飛行機をつくつてゐた時こそ、日本は「畏れ」につつまれ、「畏れ」にうなされてゐたのだ。その「畏れ」を今はカラリと捨てることが出來たのだ。どうしてか。日本は大死一番したからである。持つてゐるものをスツカリ投げ出して「無」の境涯になりきつたからだ。佛敎のことばで云へば解脫である。一切が空であることをさとつた朗かさである。空であるから犯されることがない、それだから「畏れ」といふものがない。これこそ觀世音菩薩の心境ではないか。されば菩薩は「能く無畏を以て衆生に施す」のである。

私は思ふ。日本の新憲法の戰爭ほうきの條は一つの信念である。そうして此の信念を以て、ひろく世界に呼びかけたのである。すべての國をして此の信念に歸一することを說いたものと云へる。この意味に於て、日本の新憲法は觀世音菩薩の大慈悲心と通ずるものがある。——昔泉水

動作にリズムを持て

荻原井泉水

おゝ、何年ぶりだらう、かまくら音頭のリズムがきこえる。をどり手の手びようしがきこえる。十七八日の月がいましがた山の端をはなれた近くの廣場で、ぼんをどりのけいこがはじまつたのである。

×

「をどる」といふことは「うたふ」といふことと共に、人間だけのする樂しみである。「うたふ」といふことは、言葉にリズムをもたせることだ。「をどる」といふことは、動作にリズムをもたせることだ。からだがリズムをもつて動く時には、心も亦しぜんとをどるのだ。手も足も此時、ほんとうにいき〳〵と自由のよろしさを生きがひとして經驗する。

×

戰爭のあひだ、私達は、自由に考へることも、自由に云ふことも、自由に動くことも許されなかつた。考へ方も、言葉も、行動もすべて枠の中に入れられてゐた。枠の中ではリズムといふものがない。だから、戰爭中は、ほんとうに好い「うた」も出なかつた。もちろん「をどり」も出來なかつた。いかにも、さびしいことだつた。それが今、枠から出て、やつと、人間の本來のすがたに解放されたのである。

×

農民の生活といふものは、忙しい時には非常に忙しいだらうが、その季節の自然にしたがつて、仕事をしてゆくのだから、自然といふものにリズムがあるやうに、その動作にはリズムがある。田植うたといふものがおのづからうたはれるのも此のわけ、ぼんのをどりが、農民から生れたのも此のわけ、戰爭中にも農民だけは其の生活をかへなかつたのも此のわけである。

×

都會に生活するものは、農民のやうに自然には行かないが、さういふ氣持を出來るだけ取入れて、日々平常の生活を生かして行きたい。朝は、新しい日の光のやうに、其の日の新しい生活設計をし、一日の仕事はせい一ぱいはたらき、さうして夕べの一時は、すつかり解放された氣持で、自分の心のをどりかゝるものに、飛びつきたい。つまり心をはづませよ。はづむものにはリズムが出る。何事にもリズムを以て動作することほど樂しいことはないのである。

代田青田

荻原井泉水

○六月十六日、羽後福地村、福岡灰斗方にて

田植の手傳すといふもいとをこがまし

おほかたは植ゑをはりけふ植ゑる此の田、水をたたへ手につかねてゆたかなる苗ことし五本植といふ苗は手に手に苗は足もと足もとに植う田植君がうゑ私がうゑ足のおきどころなきにうゑ田植のあしあらうてぬれた足をぞうりに田植のあしをあらふ水も田に行く水雄物川ながき橋長き日をへし田を出でて歸る此のへん田は植ゑそろひ君の家二階があり私のたんじやう日は田植祝のどびろくもよし

○七月十九日、越中北加積村、高橋良太郎方にて

日のさがる方が海とおもふその方も青田君の家はいかにも歸家穩坐とかいて青田の中うちはもいらぬ風のわたしのかいたうちはあかりは竹にも、風は窓からもくる酔うたほどでもなくてコップの水をうつくしとおもふ晩こんや竹の中にかやつつてくれたやうな、其の中子たちべんきやうする聲もわたしも起きて、もくげしろいもくげしろいそこまでおくさんおりたちておいとま朝は青田の朝日、君はおくつてつとめにゆく

麗日壇

井泉水選

夕方すこし風たち月見草いまひらく　渡邊さとる

月夜で月見草打あけられてゐる

そうしたことも月見草が朝になつてゐる

ゆふべのことを、月見草また今宵の蕾もつてゐる

咲き群れて月見草遠くを灯して走つてゐる

燒け殘つた煙突一本梅雨ばれ月夜　田中井夢

木のなか灯がついて夏がきてゐる

くらくなつて海がみちてくる巖

湯のまち傷兵さん夏の日の影のない時間、を通る

こんばん常會のしらせ子供が來てひぐらしまだ日がある　高橋良太郎

青あし水にこどもがゐるおとなは釣つてゐる

日ざかり箱うゑのトマトの青い實の二つ三つあるのも

ひけてきてしばらくはあかるい家のまへ田の植わり

桐の花田に浮く田うゑのはじまり

逢いたさ出て來てくれて月の夜あかるい草の葉

アメリカ兵とニッポンむすめどこまでもどこまでも燒跡

先生におゆかたを木槿のしろさはつぼみ（井師御來訪二句）

もう虫がないてゐるやうなお背なへ膏藥

當用漢字 其他

井泉水

このたび、政府から「當用漢字」一千五百八十字が發表された。又、「新かなづかい」が發表された。それと共に、朝日、毎日の兩新聞では、これに協力して、新聞を作るといふことを、十二月一日からはじめた。國字問題にふかい關心をもつ私として、まづ、けつこうなことだと云ひたい。

そこで、これに對する世間の聲は、あまり大きな聲でする批評はさつぱり聞こえないけれども、知識階級ことに文筆のともがらは、おそらく不平たらゞゝであらうともおもはれる。一體、漢字制限の問題は、明治の中期から文部省内の國語審議會で審議をして、大體を取りきめて發表すると、諸方からもうれつに反對される。審議のやり直しをし、又發表すると、又、反對されるといふことをくりかへしてきたのである。審議の結論といふものは、どうせ程度の差に於て多少の缺點はあらうから、反對のために反對をしてゐたらば、百年河清をまつ

けふあすせがれが復員する胡瓜に手をやつてゐる　和田光利

白木蓮に朝月はある神父さん默讀　橋本淳一

てふてふよわたしは集金人ですゆまりするとしてつくしんぼう　飯尾青城子

たしかに春雷うめの木桃の木　山本木天蓼

花の觀ごろはすぎてゐて八重櫻がひともとたわわな程に咲いた枝を描いてゐる素描　井手逸郎

子つばめ巣からおつこちそうになるともう巣立つ

朝、照り入梅の木の橋を渡つてゆく

白鷺の一羽青蘆を青くす

佛さまのお蠟の火でおそい夕餉かこんでゐる、あらしさうばうとくるるうなばらの鍵穴へ鍵

墓は山に見えてゐてその徑ほそくして蕎麥の花どき

葭の穗たばこのにほひ、釣竿出てゐる

風が海の白くなる巖に松

春の日へ斜に青のりほして四角な

青き廣けき葉につつみて餅は小さきも

石段上るだんだん海が見え全く見えて夏

氏神さまと夏かげすこし離れて神官の家

それから繪馬堂のうしろの梅がなつてゐる木

夕べ壁土のいろほたる光りそめたるなり

水ゆたかに山おだやかに夏の日がくれてゆく

朝の日にぐみの赤さの透き通りてある道

桑の畑の向う實に靜かにしてけむらし

幼い子戸をくり・夏の朝の日あつい

どころか、何時になつたとて、實現出來ることではない。ところが、はしなくも敗戰の結果といふ大きな事實に依つて、この反對の聲が封じられたのであつて、こゝにはじめて、漢字制限が正しい軌道にのぼることゝなつたのである。まづ、けつこうなことだと云ひたい。

私たち、文章をかくことを職とする者にとつて、當座のことを云へば、これは不自由である。日本語といふものは、元來、ことばの數にとぼしく、たとへば「あおい」色をあらはすのに「碧」のあおさも「蒼」のあおさも「青」のあおさも、又、みどり色さへも、普通には「あおい」と云つてゐる。で、自然の風景を形容しようといふ場合には「碧」とか「蒼」とか「青」とか文字の上で、その色をハッキリと表現する必要があると考へる。ところが「蒼」の字も「碧」の字も、當用漢字からのぞかれてゐる。「青」一語で行かなければならない、といふ風に當座は不自由を感ずるだらう。然しこれは元來、日本語のまずしいところを、漢語をもつておぎなつてゐたのだからズルイ方法である。ズルイ方法をもつて、當座の用は辨じてゐたがために、日本語そ

ひる時鳥病　酒井仙醉樓

栗の花の明るい　小谷信夫

南瓜がげんきな葉　財馬呵歩

夏至のやつと耳すこし遠くなつた　柳田流矢

十五夜であることとこ暗いとこ月高くなる　佐々木石々

雨があがると山が遠　病人けふは窓へ倚るほど　井上充夫

雨あがる夕はつつじとがしづみ　病人安靜　原蝦煎子

五月、白い花の野のんにも無いこともねる

泊るつもりで山越えてきて青くて桐ばたけの鴉

猪除け垣の繕ひも雨りに咲くなかの夫人

裸になつてわがからの野茨の花を

ひぐらし、先生今日やめの咲くころ

あちらのもめごとこちらのくりごととみのきて

くちびるになるまで煙草多朝を行く

月に雪のふる燒跡に建つ家

燒あと雪ぞりつづいていく葱たばのせてゆく

梨の花のあかるさもくれては白い鷄の白さも

笠の雨苗代の雨よい雨となつてふる

ことしの天長節はいとどしづかに山さくらの散り

小さき手にてほたる死にたる

母は蒔くもののことを、あにおとと胡瓜をかじる

あさかぜとまとは一本立てにして花つけて

蟻と竹の葉と風のきてゐるたたみ

山に入りこみて湖水の夏の波青く草間に

櫻さけば家を吹きぬく風のよし

のものを豐富にすることの努力をわすれてゐたのである。これはマチガイだつたのである。これからは日本のことばそのものを豐かにすることを考へ、研究し、努力しようではないか。

私たちの俳句の上で云へば「陽」といふ文字を、これまでも私は好きでなかつた。自分でも、ぜつたいに使はないでも日本の又、投稿の句でも、一がいに「日の「ひ」」嫌つたわけでもないが、「陽」とかけば「多の字を用ひたくおも多の日」とかけば「多ことばでは意味と、かきわけたい氣持は誰にもあらう。だが、これも安易な考へ方である。日本のことばそのものとして、それが「日光」か「一日」かといふことをハッキリと感じさせるような表現を工夫すべきである。安易にも文字によろうとせずしてことばそのものを練るべきものである。私たちの俳句の上で「昏」といふ字が、よく使はれてゐるが、「暮」の字と書きわける要はほとんどないのである。昔の俳句では「徂く春」「逝く秋」などと、シャレて書

いきよの影と影がたはむれてゐるこども　橋本健三

海面に日がさし照りつけてをる海面　古林巴水樓

花を持たない雪柳も焼け殘つてはゐる　青木青華

泊るとして涼しくしぼつてきた山羊の乳など　淨心寺　惇

谷中の塔が青葉の中、一週忌に來る夏になる　木戸夢郎

わづかに砂をしめらすほどな雨の松原ぬけると海が夏　一色、如佛

掃いても掃いても櫻落葉の英靈引渡所　巣山鳴雨

鶏小舎やつと出來上つたそこら掃いてゐる殘菊　木村緑平

疎まれてゐて田の水を見廻る　井上有紀男

七日七日の供養もすんで麥田は青田

氷がとける車汗したたらしひいてゆく

子ども菱とつてゐる待てば暑いもの待つてゐる

變れば變る世の中の管の先から玉が出る玉屋は昔のまま

月夜のぶどう棚から月がしたたる青いぶどう

胡瓜さがらせて夏らしくポンプ押せば出る水

鎌倉山合歡さけばその花に觸れてバスのとまるところ（蜻郎追憶）

かなかな碁笥のふたに石をおとす音のその頃を

ゆきもかへりも電車でこのへん山の紅が雜木紅葉

空けておくのも日あたりの好くないからし菜蒔いておく

かどまでもどつて來てやんでゐる雪

あすは多至の今日は日の照つてゐる潮川

春は芽ぶく木や養魚池のあたりに小供のゐる

つもつた雪のばさりとおちてぱんになるごはん

水に人の通る影が松に花がさいてをる

けふは海へ畠の大根の花のそば、とほる

いたものだが、これも「行く春」「行く秋」とかけば十分である。ハタは「畑」、ハタケは「畠」と區別してかけば重寶のやうだが、これもおう〳〵混同されて讀まれるから「はたけ」と發音したい時には「かな」でかくのがよい。「當用漢字」では「畠」の字は封鎖されたのである。

層雲の俳句欄に出てくる漢字といふものを統計した人はないであらうが、これを統計してみたならば、おそらく三百字ぐらいではないかと思ふ。かつて、或人が層雲專門の印刷屋をするとすれば、活字は何本もいらないから、その點でははなはだラクだらうと、笑つて話してゐたことがある。その代り、普通の印刷所にはじめて層雲の原稿をわたすと「山」「川」「水」「草」「雲」などいふ活字――普通にはあまり多數用意してゐない――がひんぱんに出てくるので校正刷は缺字だらけになるのである。かように私たちの俳句の上で「常用」される漢字の數は、きはめて少い數だから「當用漢字」一千八百五十字ではありあまつてゐるやうに思はれる。だが、俳句の上の「常用漢字」であつて、「當用漢字」から封鎖されたものもかなり澤山ある。たとへば――

働いたはだかくろいよるとなつてをる二階のやま　池田詩外樓

古里お盆くる頃ひぐらしあけくれのひとときはよし

ふるさとどちらみても青田あをいやま田草とり田にゐる

青田てんてんと鷺の、白くて飛びてもゐる日を上にして（井師と小濱行）

青田日を入れたばかりの山のかたち一驛一驛近くなる

日ざかりお渡りの敷砂しいた青田の此道を行く

けふお祭りといふ羽織着た君と汐さすここの橋を渡り

一寸京に來て一寸來いどりに啼かれて一日清閑（永明院にて）

裏に藪まへ流れいへに竹編むもののはだかひるまへ　池原魚眠洞

風ふけば熟れ麥案山子がうごいて雀を追ふ

暮れてからの車のものをしまひ螢出てゐる

ひざかりはひかげ

蔭、風いれてゐると水がいい音をする

水は空をうつすばかりひざかり　堀英之助

町中、かげもたぬ川が流れひざかり

雨がもる、ちがつた音がもる

青葉から滴る雨の公園に入るところのポスト

かぼちや棚の下までもつてきてくれる商談煙草にする

もう日本に軍艦のない夏をかぼちや好く出來てゐる

梯子でとどくかぼちや一つ採り二つ採り八月に入る

詰襟服ぼたんはずさずぐみの實澁いとも言はず母を亡くしてゐる子で（姉の死三句）

これつぱかしの鰹節に削り殘して死んでいつたか

ふるさとは柿が花こぼす井戸の水呑んでゐる

つぼめの腹よりも白いシャツ一枚で働いてゐる燒跡

シャツ一枚もつて田舍に行つた子どもからはがき一枚

植物では、「杉」「藤」「梨」「苺」「瓜」「茄(子)」「葵」「蓮」「牡(丹)」「椿」「楓」「葡萄」「(石)榴」「栗」「蕪」「蜜柑」などいふ文字は、すべて封鎖されてゐる。動物では「蛙」「蟬」「蛭」「蜂」「蝶」「蟻」「蚕」「蝸(牛)」「蜻蛉」「蜩」のごとく、虫類はほとんど封鎖だ。（虫で生かされてゐるのは、「蚕」と、「蚊」だけである）。「鶯」「鵑」「雁」「燕」「鴨」「梟」など、鳥類も同樣である。これは、當用漢字を定める時、原則として、動物や植物の名はカナでかくといふ建前にしたからである。當用漢字として一般の用途といふことと、讀みかへる効用の少い點から云へば、動物植物の名が文字としてまつさつされたことは尤もである。

然しながら、これを「俳句」といふ一つの特別の表現によるものとして考へると、だいぶんに困ることが出來るのである。といふのは、例へば――「いちよう」と書いてあると、「銀杏」か「一葉」かわからない。これは、普通一般に用ふる文章ならば前後の關係すなはちコンテキストといふものから「銀杏」と「一葉」とこんざつすることは、ほとんどあるまい。だが、俳句といふものは、前後の關係なくして、とつぜ

水に影が日があたつてをる　近木黎々火

壁の外から朝が冬

底まで見える海をみてゐる、時

お隣へ月夜道があるる

身一つのほかはその荷物腰かけてをる

町に月のある照つてゐて木

石の月夜くもつてくる

日の昏れの日をおいて川がある川の石

牡丹風の中大きくて葉裏見せてをる　秋山秋紅蓼

朝月山にある牡丹の咲く

晴れた山裾から街、何か白く復興の初夏です

風が山を吹いてゆく夏朝水くみ

山から出て青田の道ながらそうてゆく

月が出る山月の入る山としてみんなすずしい

虹のあと仰いでは更に青い山ばかり

青田に月があかるくてをりをり雲の通る　内島北朗

兎にやる青い草青い花初夏

山の中山が見えなくなる雨の音

土間が廣くて暗くて馬が居ると云ふ音

冷凍の鱈が店頭子供達すべつて居る

昔の糸車など音させて居て山も山の中

山の上山のかげ人の住んでゐる殘雪

鶏が昔の馬の値だと話す床屋の鏡

敗戰の殘がいが錆びついて桐の花さく

水は水のままに流れてゐる山の藤

んと表現がはじまるのだから、この書き分けが出來てゐないと困るのである。――「ふじ」と書いてあつて「富士」と「藤」ともまぎらはしい場合もあらう。

のぼればまつにふじ、そこにいこふ

といふ句があつたとすれば、富士か藤か、これは文字の上だけでは判斷がつかないことになる、こうなるとまつたく困つたことになるのである。

もつとも、こうしたまぎれやすい場合はそう澤山はあるまい、とも云へよう。「雲」と「蜘蛛」などはほとんどまぎれることはあるまい。「桐」と「霧」なども、だいぶんに感じがちがふから、これもまづまぎれることはあるまい。「竹」と「茸」も同様に、まづまぎれることはあるまい。しかし俳句といふものは、一讀して、活字の上で云へば一見して、スウッとうつたへてくるところに、その俳句らしいあじわひがあるのだ。いくども讀みかへして「こうだらうか」、「あゝだらうか」と考へめぐらして、「げつきよくこうだ」ときめて解つたような句は、おもしろくないのである。だから書かれてゐる句の意味がまぎれやすいといふことは、きよくりよく避けなければなら

夕日がせんだんの葉をそめてゐる氷かいて氷屋さん　中村苦味生
のいちごの花の實となる病む人をたづねてゆく　平位青水
まがると月が又まともによい音樂を聞きたいとも云ふ　井形春一
盗られたあとの馬鈴薯の花ぎすはちよんちよんとなく　小林不未鳴
茶の花白いみんなそろつて母の墓へゆく　松田一男
夕べあられ、水賣り馬車がきてとまつてゐる　中谷操
山に雲下りて田植の頃となつて居る　畠山實治
麥の穗も雲一つない空の晴れやう　田中操
ずつと水田ばかりの滿載トラック　田中星々
さくさく鋸の音が木もれ日　阪部蝶三
かきつばた尋ねたい家たづねあてゐる　片岡樹裏人
ふうりん今年の風に鳴つてゐるので去年のいまごろ　栗栖ひろよし
月がかくれて地藏さまのほうたる　新納香樹
花が葉になりホームの花掃いてゐる朝
お客があつて朝雨のさんしよつみに出てゐる
青木多からの赤き實の春が疲れてゐる
水に降る雨の島にも降る復員船は港の口へとまつてゐる
釣鐘が戻り私が戻り昔のままのぼろ寺でつゆが降つとる
昨日は町へ今日は春の日耕して居る
ここまで來ると瀧がきこえる蘭が咲いて居る
草の上に空がある繩とび繩とび
百日草咲けばあかし末の子に供へ
山が山の容にくれてゆく燈が燈のいろになる
パンは銀の皿に、夕べは鷗を浮かせてゐる
山河ありといふばかり七日月、日本に還り

ない。これは、俳句を書く上では、ぜひとも考へなくてはならないことである。

さりとて、私はこのために、當用漢字の制定に反對したり、チヤチヤを入れたりするものではない。俳句といふ一文學の上の問題よりも、日本の國として文運の問題の方が大きいのである。此の重要な問題の線にそうて、俳句の方でそれに順應してゆくのがほんとうである。

そこで、俳句のように、一つの特殊のもので、他にも何か「常用漢字」では不都合を生ずるものもあらうか、と考へてみるに科學の部門で、やはり、此の當用漢字だけでは困るものがあるらしい。それで學術的の專門用語は常用漢字以外を使つても差支ないといふことになつてゐる。物理學の上で「蒸餾」「凝結」などいふ專門語は、それとしての字が許されることになるらしい。然し、これは俳句の場合とはちがふ。「藤」だの「霧」だのといふ文字は、季題季語であるから俳句の專門用語だなんぞといふコジツケの考へ方は、若しそれをする人があつたとしたならば、大きな間違ひである。

それならば、俳句の場合、上に云つたよ

鵬がたき上つた滿月　黑木紅足馬
鳥の二三羽はかならず浮いてゐてふるさと　木村宇平
落ちて雨ふる桐の花看とりして夜明けて歸る　夏堀望子
みぞはぎ水にうつり無事に歸つてきた　前川紅二
もらつた水さげて青柿落ちる　森田十雨
しゆろの木が花を雲は夏ぐも　小西佛舍利
青葉月夜の手拭かむつて頼みにきた　木野木鳥不止
太陽、ダリヤの花のたをれて咲いてゐる　横關碧樓
ぶどうの茂る葉もれ日のとりごやのとり　天滔棗人
玉葱かゆにしてうましと思ひあしたゆうべ　泉丈
ポンポン夜釣りに出てしまふとホウホウふくらふ　增村辰郎
蟲は暑くてよるは星空のならの木林　原實
ゆうべはゆうべの雲のしづかな竹藪　名雪理輝
子どもも起きてきてはだか南瓜の花大きく　芝田青崩
玄關の小砂利の花に鷄頭が奥さんおでかけです
夜明けてかぼちやの花鷄が水のんでゐる
朝霧うすれゆく葦のしげみ川音
はつなつの馬と働くほほかむりする
若葉にゆふ月馬にこむまがついてゆく
ところてんとかいてある角店をまがつてえんてん
草は木は、小鳥は小鳥であらしあがりの虹が出てゐる
そぞろ野道を歩きのびるの丈長きが風にゆれ
大きな樽大きな竹だが、の夏の日なた日かげ
月の光の暗いところも南瓜の葉
青い畑のお月さま戸をあけて寢る

うに、カナで書いてはまぎれやすい場合はどうしたらばいゝであらうか。

そこで私は、カナヅカイといふもので、これを區別したい、といふ考である。

上の例で云へば、「銀杏」と「一葉」との區別は「いてふ」と「いちよう」と書きわければよろしい。「藤」と「富士」とは「ふぢ」と「ふじ」と書きわければよろしいのである。

こういふと、「何だ、それは國語國字の平易化に對する逆流ではないか」といふ批評が出ることゝ思はれる。然し、私は歴史的のカナヅカイといふものを全面的に保存せよといふのではない。それは大部分廢止すべきではあるが、一部分は（適正に整理した上に）新しいカナヅカイといふものを制定する必要があるとおもふ。一體、モンジとはその機能に於て、話しことばとはおのづから別なもので、一つは目にうつたへ一つは耳にうつたへるものである。コトバは音としては同じ音であつても、アクセントに依つてはつきり判明されるやうに、モンジとしては書き方に依つてはつきり判明されることが必要である。書き方とはすなはち、スペリングである。アルファベット

起きては屋根に霜のあるたびを足にはく　林木衣樓

梅の枝はまがりくねつてびつしり蕾、日のさすと娘頃の着物ねんねこにして着て大根買ひに來るどさりというびん置いてゆくのも山之内青葉に一軒　皆川蓼二

屋並屋根の石ぬれきつて夏の海へふる　木村乙羊

籐椅子、夏の海にふる雨のしづかな正直もんで馬鹿を見たことなんぞ種まいてゐる　佐藤專子

春の雨ふるまちからはなれてゐるくらしだまつてきいてゐる話もよし車窓春淺き田圃もよし　遠藤虹水

開いたあやめ蕾のあやめ朝むしろにそらまめ干しひろげながいいちにち　栃本よし雄

五月のいりうみの雨そそぐみづのも豆の蔓のびるだけのばした花の朝のみそ汁に入れるのをつんでゐる　村田白鵜

雲も夏めく病人に見えて桃の實あからみそめるほどな　内久根聖巳

灸すゑてゐて夜がすずしいあめのふるあめの音夏の日の山かげの山と見えてきて湯町のつりばし　高崎貞之

道に寫眞屋さんが朝のかげ掃いてゆく温泉宿あめのおといなづまがして谿のけしきちよつとした家のちよつとした庭、のトマト畑　品川幸一郎

俄雨ふつてはれた道路工夫でまだ青いトマト畑

橋に雲の出て人の通る夏になる

學校畫で退けて田の中の道まつすぐ來る

正直すぎての貧乏ぐらしの茄子の花さく

野の彼方二月の海の青磁の色の暮れてゆく

やけあとも月夜の人の通りほたるうり

をつかう純音標文字の國でも、スペリングといふものはあつて、決してやゝこしいものではない。わが國では在來、漢字といふ難しいものをおぼえた上に、又、カナヅカイといふ面倒なものをおぼえなければならなかつた、それゆえになんぎだつたのだ。漢字の方を制限してゆけば、少々のカナヅカイの書き分け方をおぼえるぐらいは何でもないことである。まして、現今の一千八百五十字の漢字もだん〳〵に減らして結局はカナばかり、更にすゝんではローマジにまでもつて行こうとするからにはカナヅカイ（スペリング）を新しく制定することは必要だとおもふ。この「カナヅカイ」といふ書き方でも、標音的にはカナズカイであるが、私の考としては「使う」といふ意義が十分に意識されてゐるコトバなのだから、ツカウを生かしてツのニゴリのツを用うる方がいゝといふ。コヅカイ（小使）フミヅカイ（文使）などもそうした方がいいとおもふ。

それから、カナが多くなると、一體に早く讀めないことになる。これがいちばん困る。モンジといふものは、以前にも書いたやうに「一目して」その語の字だといふこ

離れて木の間すずしいらんぷで客がある　山中登貴枝

豆づる巻きつかうとするゐなかに住みつかうとする　里井正子

耳のうしろ汗がたれる今日が終つてゐる　石原元寛

うこぎの花はさびしいひとりでおもふことはおもふてゐる　金平二火

家のうらながれてゐるうこぎの花白くてちればながれてゐる　大竹大三

屋前若竹屋後若竹つきよのつき　岡田浪干

病もいでて蓬つむほどなまだ芽吹いたばかりの蓬　三好米子

ちつちやな汽關車が汽笛吹いてゆく疎林はつ夏　白井正夫

それでも旗日の旗が青葉に吹かれてゐるところ　藤澤せいじ

骨壺、七十年の臍の緒入れて母を葬る

春の水平線とくれてゆく驛の木柵

げとげこふよふよ月夜がくもつてゐる

月層々の雲をぬぎ討論會がをへた拍手

十薬の根の白うて洗うてうちのとしより

日の落ちた流れに手を入れて日のながいぜつてう

師をまへにして川音の風がでるとうちわをおく

橋、のことからまつすぐ山の町の見とほせてゐるはつ夏

つゆあめ朝はしじみのみそ汁夫は旅に出てゐる

こんばんここに祝言がある土藏に春のくれてゆく

ゆふだち汽車を通してから晴れてゐるふみきり

ゆふだち泉水に灯がとどいてゐて降る

夕だちのあとの星が青い蚊帳つるとき

いのちあつてまた見るふるさとの山かつこうないてゐる

膝にすこしあつい日がきてゐる山の驛のいたどり

かいこ四どめのねむりにいり雨つやつやとふる

とがわかることがないではあるまい。ひらいよみ」してやつとわかるのでは、ほたるくてしようがない（例へば此の一節の如し）。ローマジだと、一語づゝまとまつた形が出來る。一語と一語との間に空間が出來る、その一語一語が一かたまりとして見なれてくるから、ちようど漢字のやうに形としてすぐその語だといふことがわかる。アルファベットの字形が平べつたくて、集合してまとまるように出來てゐるからである。此點では「カナモジ會」で主張してゐるように、平べつたい特殊のカナ字體を作つて、一語づゝ集合しやすいようにすることがいいのである。然し、これは全部をカナモジとし、且つ横書にする場合に用ひることであつて、漢字とカナとまじつてゐては、どうにもならない。且つ現今の狀態として縱書が主であつて、その上横書も併用するといふのでは、活字を平べつたくすることは出來ない。横にも縱にも同樣に用ひる現在の四角體でゆくより外はない。そうすると、カナばかりで書くと「ひろいよみ」することになる。この「ひろいよみ」の弊をすくふために、適當に漢字を配置することも、どうもやむをえないようである。漢

朝月のそのやうな白い服をきます　芦立陶抄子

月がボーカーなどしてのぼつてくる

船が出て行つたり入つてきたり灯してゐたりして梅雨

梅雨は襖にしみのある山水　武田桂

毬つく梅がちります

草のなかの道が草のなかを歩いてゆく

すこうし熱のある體の去年の團扇に繪が描いてある　菅崎道雄

川に寫る橋の手すりの水に降る雨が今年も梅雨になつてゐる

花のなかに入つて蜂が出て來ないよ

蚊帳釣つてもらつてゐる夕燒けてゐる（病床）

竹、セル着てセルの肌ざわり少しあかるくなつて降る

風のてふてふと水車にかかつてゐる水　木庭たつを

秋の青い落葉と流れの水汲んだバケツ

病人ちよつと羽織きて床屋へゆきます明治節日和

月の世界に葉が降る

ひとを想ふことにたへ樅の木の雲赤く夕づくる

灯に淡いメランコリアが白い蛾になる

硫黄マッチの炎のいろ變るときのさびしさをたばこにする　浅井多二

白痴の娘何か笑ひ西瓜の花日のさし

横をむくときの水枕の音がするだけの、夜で

かぜのろうそくのあめとなる

朝の透明な日がガラスの中の液體　上野忠三

粥が煮えるすこし句を作るきもちになる

つるがつるをさがしてゐる空からふるあめ

ながあめになるあめのぬれてゐるばらのはな

字數止を理想とする上から云へば、はなはだ不徹底だけれども、實用上から見て、現在の狀態としては、この「文中における漢字の適當配置」といふことは、やむをえないことだと私は考へる。

ところで俳句の場合とすると、これは都合のいゝことが一つある。俳句は長い句も短い句も、活字で組む時には一定の長さに組むのが普通となつてゐるので、その一行の間に多少の空間がある。此の空間を現在では均等に割りあてゝゐる。これを、均等ではなくして一語と一語との間に空間を作るように割つてゆくと、コトバの「わかちがき」といふものがしぜんと出來る。たとへば「第十九句集」より——

ふじがれいめいのいろと

なつたぶどうのはつぱ

又は、

えんていさんとてふてふとつき

のようなとおいききうで

これは全部カナにするにも及ばない句だけれども、たとへ全部をカナにしても、かように「わかちがき」にすれば、そう讀みにくいことはない。「わかちがき」の普及といふことには、われ〳〵の俳句がその實

馬鈴薯の花にてふてふもはるばると來て人を訪ねる　増田松雨
いつまでも船追ふて來る鳥に夏の雲、うねり大きくなる　植田市籠
新家庭は社宅でどれも同じ家の蟬の鳴く　木村丁字
お隣も茄子やトマトを作つてゐる花が咲いて小さな實もある　水谷青史
ここらのお百姓みんなはだしでお茶の實は青く　加藤裸秋
戻れば どちらも 山の 月夜が 自分の 家
海が白浪立ててゐるみかん賣りのおばあさん
舟 に も 笠 き て 雨 が 春
雲が夏で山すその家子供がゐて時間のバス通る
湖の浪たちも秋が早い土産物屋の娘さん
まづしさは頭にもたつぷりみのあるさかな
枝 が 雪 に な り さ う な 枝 振 り
なげかけなげかけはさかけのおとにおなご
やがて鷗がくるいたどりの芽が紅さす
旅 重 な れ ば 旅 は 軒 の 干 柿
かじか、山がまつたく日を沈めてゐる
雲 の 中 に 山 が ま つ た く 日 を 沈 め て ゐ る
機械のうなりに風が青田からりと晴れてゐる
ほたる、月は高い木にかくれてゐる
つぼな摘みもちて吾子たちけふはせんせいお泊めしてゐる
かひこまぶしのなかでねむり字引の字がこまかい少年
こどもと繪をかく氣持になつた夏の山へ坐つて
子守が學校ひけてきた子でなつぐみのうれとる（憶蜻郎）
やまのかぜふくとうごいてゐるみつまたのはな
笠 き て が つ か う へ 杉 の か な か な

行にはそつせんする立場にあるとも云へる。

なほ、この句の「てふてふ」も前に云つたように、私は「ちよう〳〵」としたくない。これは「感じ」の問題であつて、「ちよう〳〵」では「てふてふ」のやうに、感じが出ない。尤も「感じ」といふことは、「詩」だけの問題であつて、一般のことではないだらうが、その點では、俳句は詩として味ふことが根本なのだから「詩」としての書き方の特例を、今しばらくの間（國民全體がモンジに對する感じを一新した上は別として）用うることとしたいと私は考へる。

今日の『サン』といふ新聞に高田保氏がユウモア感想をかいてゐる中に、ローマジでkoiとかaiとか書いても、どうも「戀」とか「愛」とかいふ感じが出ない。これをKoii, aiiと書くと感じが出る、とじようだん風に云つてゐるのだが、こゝに一つの「感じ」といふものに對する眞理があるとおもふ。と云つて、これをカナにしては勿論いけない。とにかく、カナ書にはカナ書として一つの綴り方といふものは必要であつて（そのうへに「詩」としては「感じ」